我輩は犬でござぁます

シュール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
我輩は犬でござぁます

【Ｎコード】
Ｎ０７０３Ｄ

【作者名】
シュール

【あらすじ】
一男は犬が大嫌いなフリーターだった。日ごろの態度を父親に叱責され、その鬱憤を好敵手のジョン（向かいに住む犬）にぶつけながらも、ある日高校の友人から夏見を紹介してもらう。アルバイトも初め、やっと生活が軌道に乗り始めたと思ったのもつかの間・・・。生きるって何だろう・・・働くって何だろう・・・僕って何だろう・・・犬・・・？

我輩は犬でござぁます1・・・一男登場

1

「隣の動物病院えらく繁盛してるなあ」
竹男が発泡酒のビールを飲みながら言った。
「日曜日までやっているのがミソよね」
典子が野菜炒めの入った皿を二人しかいないテーブルの上に置きながら言った。
「今、どこも子供が少ないから、代わりに動物を飼っている家庭が増えてきているからな」
皿の中の竹輪をつまんだ竹男が喉に流し込もうとしたとき、典子が口を開いた。
「うちも犬だったら良かったんだけどね・・・・」
「ほんと、そうだよ・・・こ、こら何を言ってるんだ」
口元に付いた竹輪の汁を竹男が慌てて拭こうとしたとき、一男が階段を下りてくる音が聞こえた。
「飯どうすんだっ」
竹男が聞くと、声の代わりに、パタンというドアの閉まる音がした。

ぼとぼとに濡れたビニール傘を傘立に立て自動扉を開けて入った店内には一人も客はいなかった。
「一日延滞につき３００円、３本で９００円になります」
アルバイトと思しき男性がお経を読むように言った。
「１週間借りて３００円なのに、１日遅れてどうして同じ３００円なんだよ」
千円札をテーブルの上に落としながら一男が聞いた。
「決まりなんで」
「そんなことわかってるよ。

あなたもおかしいとは思わないですかって聞いてんだよ」
「まあ、言われてみれば・・・」

あれだけ降っていた雨が嘘のように止んでいた。
アダルトビデオばかり3本が入ったレンタルビデオ屋の青い通い袋を抱えて一男が玄関のドアを開けようとしたとき、向かいの４０３号室の島田さんの家で飼っているジョンがけたたましく吠えた。
「うるせえんだよっ、クソ犬がっ」
一男は犬が嫌い、いや、嫌いという言葉を使うのがもったいないくらい、とにかく、嫌い、だった。
子供の頃、まだ、もちろんまだ父親と口をきいていた頃、近くに熊みたいに大きな犬を飼っている親父がいて、一男を見かけると、わざと鎖をはずし、恐がる一男の姿を見ては手をたたいて笑った。
そのトラウマからか、どんな小さなかわいい犬でも、触ることどころか、足元にでも寄ってこようものなら、ギャーッと奇声を発し、口から泡を吹いてその場で悶絶した。
「どうしてペットを飼えるマンションになんかしたんだよ」
チンした野菜炒めのもやしの束を口に運びながら一男が聞いた。
「お母さん、犬が好きだから」
冷めたご飯にラップを掛けて典子がチンしようとしたとき、風呂から上がった竹男が、バスタオルで、薄くなった髪を拭きながらキッチンに入ってきた。
「うちの犬は帰ってきたか？」
一男の箸は止まり、電子レンジの中で回っていたお茶碗はボンといってサランラップを飛ばした。

2

（寝れねえなあ）
島田さんちのジョンは今日も不眠症に苦しんでいた。
（俺も年かなあ。人間で言えばもう六十だし、ひょっとしたら鬱病

じゃないだろうなあ。この間ご主人様が見てたテレビでやってたよな。男の更年期障害だって。確かに最近、やる気がまったくないからなあ）

ガチャッと向かいの家の扉の開く音がした。

（また、あの一男っていう奴だな。若いくせに仕事もせずに毎日ぶらぶらしやがって、なんて言ったっけな、ニーズでもないしヌードでもないし、あっそうだ、ニートだニート、カツラの会社みたいな名前だけど、この国にうようよといるって言ってたな、だけどそんなんでこの国は本当に大丈夫なのかよ）

鍵を掛ける一男をジョンは確認した。

（あいつどこ行くんだ。どうせ、コンビニでエロ雑誌の立ち読みでもしに行くんだろうな。いっちょ吠えてやろうか）

「ワンッワンッ！！」

一男は飛び上がって驚いた。

（へっ、ざまあみろ）

「てめえーっ、いつかぶっ殺してやるからな」

一男はジョンにメンチを切ると、廊下に唾を吐き、エレベーターホールに向かって歩いていった。

ж ж ж ж ж ж ж ж

（おいおいなんだよ、この混雑は）

マンションの隣の動物病院は月曜日の朝から犬や猫を大事そうに抱えた人間で込み合っていた。

（だいたい過保護なんだよ。自分で言うのも何だけど所詮犬や猫なんだからさあ、ちょっと具合が悪いからっていちいち病院なんかにつれてこなくっていいんだよ。寿命のない奴はいくら過保護にしたって死んじゃうんだから。そんなことより、よく街で見かける、車椅子に乗っているおじいさんを押しているおばあさんの年寄りのカップルをなんとかしてやれっての）

「ジョンちゃん、さあいきますよ。恐くないからね」

島田さんの奥さんがジョンを抱え、診察室に向かった。

部屋に入ると髭を生やした先生がいた。
「先生。最近、うちのジョンちゃん、ちょっと元気がないんです」
（欝病だよ、何をするにもやる気が出ないんだ。それに夜が眠れない。何かいい薬くれよ）　じゃあちょっと見てみましょう、と言って、先生は血圧を計り血を抜き、ジョンのからだの到るところを揉み、しばらくしてから「大丈夫です、ちょっとジョンちゃんも疲れが出たんじゃないですか。薬出しておきますんで様子見てください」と言った。
診察室を出ると、ジャージ姿に金髪、誰が見ても“お水”の女がヨークシャテリアを抱いて待合室で座っていた。
（たまんねーなあ。うちのご主人様もこれくらいのかわい子ちゃんを一緒に飼ってくれたら、俺ももう少し元気がでるんだけどなあ。なにせ生まれてすぐにご主人様に飼われて、今まで何不自由なく暮らしてきた。そのことにはご主人様には感謝している。
でも、散歩しているときに見かける野良の奴達を見かけると、たまに羨ましくなることがあるんだ。確かに、決まった寝床もない、めしだって自分で探さなきゃいけない、大変だと思うよ。その代わり、奴らには自由があるよ。一生リードにつながれ、与えられためしだけ食べて、毎日のうのうと生きていく。恋愛なんてしたくてもできない。何せ異性といえばご主人様だけだからな。この前も、電信柱にマーキングしていた野良のお姉ちゃんを見かけたときは、思わず後ろから覆いかぶさろうかと思ったよ。まさかこの歳で童貞だなんて恥ずかしくて言えねえしな）
「島田様、お待たせいたしました」
受付の女性に呼ばれると、島田さんの奥さんは「ジョンちゃん、さあ、行きましょ。お家にかえって薬飲みましょうね、すぐに良くなるから」と言ってリードを引っ張った。
（もうちょっと待ってくれよ、久しぶりのかわい子ちゃんなのに・・・）
「クーン」とジョンの哀しい声が待合室に響いた。

3

「なんでなんだよ。『貸出中』の札が掛かってないじゃないかよ」
「すいません、札の掛け忘れなんです」
この間、延滞料金の件で絡まれた同じ店員が、相変わらず棒読みで一男に答えた。
「すいませんで済んだら警察なんかいらないんだよ。
俺はこのビデオが見たくて毎日ここに通ってたんだからな。それでやっと札がかってないのを見て、やったーっ、てついさっき大喜びしたばっかりなんだぞ。
借りている奴に電話して、今すぐここに持ってこさせろ」
「それはちょっと・・・」
「ちょっとなんなんだよ。
それができないんなら、店長を呼べよ」
「店長は今日休みなんで」
「休みだったら家に電話すればいいだろ」
「いえ、それは・・・」
会員になるときに名前や住所を書くペンをレジの横のペン立から奪い取ると、一男はテーブルの上に叩き付けた。
そして、なめてんじゃねえーぞっ、と言おうとしたとき、
「おう、カズじゃん」と声がした。
一男が声のほうを振り向くと、この春まで同じ高校に通っていた剛が立っていた。
「何してんだよ」
「いや、ちょっとこいつがふざけたこと言うから」

「今、何やってんだ」
ハンバーガーを大きな口で頬張りながら、剛は一男に聞いた。
「毎日ぶらぶらしてるよ」
財布の中に百円玉が1枚しかなく、ハンバーガーを買えなかった

一男がコーヒーを飲みながら答えた。
「アルバイトとかは？」
「やってないよ」
「小遣とかはどうしてんだよ」
「親からもらってるよ」
「親っておまえ、時間がいくらでもあるんだから、アルバイトくらいしろよ。友達や彼女だってできるかもしれないぞ」
剛は、高校の時には吸っていなかった煙草を吸いながら、少し一男を見下した言い方をした。
一男と剛は私立大学の付属高校で同じクラスだった。
3年の2学期から学校へ行かなくなった一男は、公立高校なら間違いなく落第だったところ、竹男と典子が学校へ頭を下げに行き、2学期分のプリントを提出するという条件でなんとか“おまけ”で卒業することができた。もちろん、提出したプリントには3種類の字が混ざっていた。
一方剛は、何事もなく卒業すると、エスカレーター式に上の大学に上がった。
「じゃあ、今流行りのニートってやつだな」
ハンバーガーの最後の一口を口に放り込みながら剛が言った。
「俺は流行に敏感なんだよ」
一男がくだらない冗談を言ったとき、剛の携帯電話がなった。
「なんだ、おまえかよ。
何の用？
えっ！？　まじかよ。
ちょっと待ってくれよ」
剛が顔を一男に向けた。
「おまえ、今日の夜ひまか？」
「ああ」
「今日合コンやるんだけど、一人欠員ができたんだ。
いかないか？

全員女子大生だぞ」
「いいよ。
俺なんか行ったら浮いちゃうよ」
「大丈夫だって。
それにたまには外へ出ていかないと、ひきこもりになっちゃうぞ。俺がちゃんとしてやるから。なっ」
無理矢理一男にイエスと言わせた剛は「オッケー、代打は見つかったよ」と言って電話を切った。
「じゃあ、7時に駅の東口でな」
念のため、携帯電話の番号だけを聞いて、一男はハンバーガー屋の前で剛と別れた。
久しぶりに伸びた背筋に西日を受けながらマンションに着くと、一男は、エントランスで、ジョンを連れた島田さんの奥さんと会った。
「こんにちは」
声を掛けたのは、島田さんの奥さんだった。
一男は無視した。
坊主憎けりゃ袈裟まで憎い、大嫌いな犬を飼っている飼い主まで一男は嫌いだった。
エレベーターが降りてくると、先に島田さんの奥さんとジョンが乗り、あとで一男が乗った。
一男の犬嫌いを知っている島田さんの奥さんは、ジョンをエレベーターの隅に押し込み、その前に壁となって立った。
しかし、いつもなら吠えるジョンが、吠えなかった。
先にエレベーターを降りた一男は急ぎ足で廊下を歩き、家のドアの前で後ろを振り返ると、島田さんの奥さんに連れられたジョンが肩を落として歩いていた。
リビングにいる竹男を見て、一男は今日が週末であることを知った。
毎日家にいるので、曜日の感覚がなくなってきていた。

「夕ご飯、何にする？」
キッチンから典子が顔を覗かせた。
「俺いらないよ」
一男の言葉に、新聞を読んでいた竹男が反応した。
「どこ行くんだ？」
一男は無視して典子に歩み寄った。
「こづかいちょうだい」
「いくら？」と言いかけた典子より先に竹男の言葉が飛んだ。
「やらなくていいよ」
差し出した一男の手が止まった。
「自分で稼げばいいんだよ。
勉強が嫌で学校をやめたんだから、だったら働けばいいんだ。いつまでも甘えるな」
一男は竹男を睨み付けると、大きく、ため息ではない息を吐くと、戻ってきたばかりの家を出ていった。

携帯電話の向こうから〈マジっ！？　、洒落んなんないよー〉と剛の声が聞こえたが「ごめん」とだけ言って一男は電話を切った。
歩きながら何回覗いても、財布の中には1円玉1枚入っていなかった。
すっかり陽が落ちた街の彼方に、大型スーパーの看板が浮かび上がっているのが見えた。　見えているのに、歩くと三十分も掛かった。
エスカレーターで3階に上がると、一男は家庭用品の売り場に行った。
週末だけあってフロアーは家族連れで込み合っていた。
防犯ビデオと店員の位置を確認すると、一男はハサミをジーンズのポケットに入れた。
周りを見渡したが視線の合う人間はいなかった。
一男は続け様に、洗濯物を干すロープを片一方のポケットに入れ、

文具コーナーに移ると、油性の黒マジックを着ていたトレーナーの袖に隠し入れた。
店を出ると、汗で濡れた腕時計をはずし、まだ八時にもなっていないのを確認した。
このまま家へ帰って竹男の前に立つと、自分でも何をしでかすか、一男にはわからなかった。

電車で行くと五十分で着いてしまうところが歩くと二時間掛かってしまった。
去年の夏以来だった。
暗闇の中に立つ煉瓦色の校舎はピクリともしなかった。
「文句あんのかよ」と言っているように一男には見えた。
足元に落ちていた小石を拾うと、教室の窓に向けて思い切り腕を振った。
小石は暗闇の中に消え、少ししてからコチンという音を残した。
勉強が嫌いなわけではなかった。
いじめを受けたことも一度もなかった。
友達も、中学から上がってきた奴とはあまり合わなかったが、口を聞かない奴はクラスの中に一人もいなかった。
ただ、どこからか「もういいだろう」と言う声が聞こえてきた。
一男は、集めてきた、さっきの小石より大きい石を握り締めると、校舎の窓に向け、鋭く腕を振った。
ガシャン、と全ての静寂を破壊するような音が響いた。
一男は次から次へと石を投げた。
消えたばかりのガシャンという音の上にすぐに次のガシャンが重なり、出来損ないのオーケストラが演奏する何かの曲のように聞こえた。
手の中の石があとわずかになったとき、近くの何件かの家から、なんだなんだ、と人が出てきた。
一男は、残った石を足元に落とすと、脇の下に汗を感じながら、

来た道をゆっくりと戻り始めた。

自宅のマンションに着いたとき、日付はすでに変わっていた。

一男は足音を立てずにそっと廊下を歩くと、４０３号室の前で歩みを止めた。

門扉の向こうでジョンが眠っていた。

ジーンズのポケットから洗濯物を干すロープを取り出した一男は門扉をそっと開けた。

４

（おい、何かくすぐったいぞ、こらっ、やめろっ、うん？　なんだ、向かいの一男じゃねえか、こいつ俺たちのことが苦手なくせして何やってやがんだ、よしっ、いっちょ吠えてやろうか）

「ワ・・・・・」

（うん！？）

「ワ・・・・・」

（くそっ、口が開かないぞ。な、なんだ、ロープで縛ってあるじゃないか。あの野郎、飛びついて驚かしてやろう。腰抜かして泣きわめくだろうな）

「そ、そっ・・・」

（く、くそっ、足が動かないじゃねえか。あ、あの野郎、足もロープで縛りやがって。な、なんだそのハサミは、こ、こらっやめろっ、俺様の自慢の金髪を、まだ結婚もしてないんだぞっ、それどころかまだ童貞、そ、そんなことはどうでもいいんだ、と、とにかく、誰か助けてーーーっ！！）

５

門扉に挟まって口から泡を吹いて倒れている島田さんの奥さんを発見したのは、朝刊を1階のメールボックスに取りに行って戻ってきた竹男だった。

「昨日はどこへ行ってたんだ？」
島田さんの奥さんが運ばれていく救急車の音で目を覚ました一男がリビングへ出ていくと、竹男は少し凄んだ声で聞いた。
「友達と遊んでたよ」
「金もないのにか」
「全部おごってもらったよ」
本当にか？と言う顔をして、竹男は朝刊をテーブルの上に投げた。
「読んでみろ」
面倒くさそうに新聞をめくる一男の手がしばらくすると止まった。
「悪い奴がいるもんだな、窓ガラス二十枚も割るんだからな」
一男は何も言わなかった。
「向かいのジョンが足を縛られて毛を刈られたそうだ。顔にはマジックで落書きまでされてたそうだ。
うちの近くにも悪い奴がいるんだな。気をつけないとな」
一男が黙って新聞を畳み、リビングから出ていこうとしたとき、典子がパジャマ姿で現れた。
「島田さんのところ大変、あらっ、あんた起きてたの。
昨日遅くにレンタルビデオ屋から電話があったわよ。
ちょっと待ってね」
典子はキッチンに行くと、冷蔵庫の扉にマグネットで止めてある小さなメモを取った。
「えーっと、お待ちいただいています、『早く出して』が戻ってきましたのでご来店くださいって」
リビングは、初めて舞台に立った若手の落語家が話したくだらない枕に、シーンと静まり返った演芸場と化した。
「これはなに？　年末に早く年賀状を出してくれっていう郵便局からのお願いのビデオかなにかなの？」
両頬に涙を伝えながら、右手と右足、左手と左足を一緒に上げ、ロボットのように家から出ていこうとした一男の手を竹男は取った。
「借りた友達に返しておけ」

一万円札を竹男から渡された一男は、スニーカーに足を通すと、そっと玄関のドアを開けた。
「クーン」
見ると、毛を刈られてはげ山の様な体になったジョンが、右の頬に“バ”左の頬に“カ”と書かれ、西郷隆盛のような太く短い眉を目の上に描かれた顔を、門扉の向こうから一男に向けた。

ж ж ж ж ж ж ж ж ж ж ж ж ж

電車で五十分、歩いて二時間掛かったのが、週末で道路が空いていたせいかタクシーでは三十分掛からなかった。
「昨日投石があったんだよね」
タクシーの運転手の言葉を無視してお釣りを受け取ると、一男は、昨日の夜、石を投げた場所に降り立った。
校舎の周りには“立入禁止”と書かれた黄色いテープが張りめぐされ、割れた窓ガラスの向こうには学校の先生か警察の人かが数人、腕を組んで突っ立っていた。
「ご近所の方ですか？」
一男が振り向くと、テレビカメラを担いだ男と、マイクを持った女性、銀色の画用紙を張った画板のようなものを持ったジーンズ姿の若い男が立っていた。
「いえ。
今年の春卒業したんです、この高校を」
マイクを持っていた女性の眉の下が三センチほど伸びた。
「そうなんですか！
このような事件が起こって、卒業生としてはどのようなお気持ちですか？」
女性は、初めてバッターボックスに立った少年のように強く握ったマイクを一男に向けた。
「すごく残念です」
「犯人像はどういった人間かと思われますか？」
「そうですね、最近夜が熱いですから、ムシャクシャした奴が、オ

ナニーのおかずがないからって石でも投げたんじゃないですか」

ж ж ж ж ж ж ж ж ж ж

大型スーパーに着いたとき、一男の長袖のTシャツは汗で黒く染まっていた。

二時間汗ずくになって歩くのも、三百七十円の切符を買って五十分電車に揺られるのも、四千円払ってタクシーのシートに踏ん反り返って三十分で着くのもみな同じだった。

人間の労働力ってほんとうに値打ちがないなと一男はつくづく思った。

アイスコーヒーが百五十円で飲めるセルフサービスのコーヒーショップで汗を乾かすと、一男は昨日来た家庭用品売り場のコーナーへ行った。

洗濯物を干すロープの切れ端とジョンの金髪の付いたハサミをもとあった場所に戻し、文具コーナーへ行ってキャップを無くした黒の油性マジックを逆さまにしてほかのマジックと混ぜ合わせた一男は、小さく息を一つ吐くと売り場を離れた。

エスカレーターで一階まで降りた時、Yシャツを腕捲りした店員がハンドマイク片手に大きな声でがなり立てていた。

「本日、四階、催物コーナーにおきまして、父の日、特設コーナーを設けております。どうぞご利用くださいっ！」

一男はもう一度上りのエスカレーターに乗った。

すごい混雑だった。

母親についてきた小さな子供たちが、ネクタイやベルトやポロシャツを手に、財布を開けて思案している姿が到るところで見られた。

何人もの人と肩をぶつけながら歩いていると、ジョンと同じ種類の犬の絵がちりばめられているネクタイを一男は見つけた。

手に取りしばらく眺め、辺りを何度か伺った。

肉眼で大型スーパーの看板の文字が読めなくなったところまで来

ると、¥3，000ーの値札をもぎり取り、しわにならないようもう一度そっとネクタイをジーンズのポケットにしまった。
マンションのエントランスに入ると、旦那さんに付き添われた島田さんの奥さんがいた。「こんにちわ」の代わりに、あなたがやったんでしょ、と鋭い視線を一男に向けた。
旦那さんは珍しいものを見るように一男の頭の先から足の先までを見た。
エレベーターを降りると、島田さん夫妻は一男の前をゆっくりと廊下を歩き、途中一度だけ奥さんが後ろを振り向き、一男に警戒の視線を投げかけた。
竹男はリビングで、枝豆を食べながら缶ビールを飲んでいた。
「おかえり」
何も言わず、一男は竹男の後ろを通り過ぎた。
「友達にちゃんと返してきたか？」
振り返って聞いてきた竹男に、一男はネクタイを持った手を差し出した。
「父の日だろ」
豆鉄砲を食らった鳩のような顔をして、竹男は、枝豆を手にして固まってしまった。
「環境に優しく。だから、包装紙は省いといたから」
鳥の唐揚を盛った皿を持ってきた典子が、ネクタイを手にして涙を流している竹男を見て「どうしたの？」と声を掛けた。
「か、かずおが父の日だからって・・・」
「えっ！？」
典子は手に皿を持っているのを忘れ激しく涙した。
〈昨日何者かによって窓ガラスが二十枚も割られるという事件がありました東都大学付属高校の現場からです〉
テレビ画面に、一男が昼間にインタビューを受けた女性がマイクを持って立っていた。〈近所の人の話では、最近夜になると暴走族が近くを走り回っており、警察も事件との関連性を調べております〉

「あなたっ！」
「おまえっ！」
竹男と典子は床に落ちた鳥の唐揚げを踏みつけて抱き合った。
「うちもいい犬を・・・じゃ、じゃなかった、いい息子を持って良かったなあ」

唐揚げから急きょ変更になったステーキハウスのカウンターで、竹男はご機嫌にワインを何杯も飲んだ。
「一男さあ、何度もしつこいようだけど、働くなら働く、もう一度勉強するならするで、早く決めたほうがいいぞ。
言うと嫌がるだろうけど、年を取るのは本当に早いからな。
俺も学生の時に学校の先生に言われてよく反抗したけど、ほんと、光陰矢の如し、若いときにやるべきことはやっておかないと」
一男はデザートのシャーベットを食べながら何も言わなかった。
「俺は本当はもう一度勉強して大学に行ってほしいんだけどな」
陶器の皿に残った冷えたもやしを口に運びながら竹男は言った。
「そうよ。
あなた成績は悪くなかったんだから。
今から始めたって、きっと間に合うわよ」
締めのコーヒーを飲みながら典子が続いた。
「おまえが本当にやる気あるんなら、父さん、予備校の授業料だしてやるぞ」
一男は、何も言わず、銀のスプーンをクリスタルの器に置いた。

ステーキハウスからの道すがら「ネクタイ高かっただろ」と言って竹男からもらった一万円札を財布の中に入れながら、俺の労働力も満更でもないなと一男は思った。
テレビをつけると、また、昼間インタビューを受けた女性が出ていて暴走族のリーダーから警察が事情聴収を始めたことを伝えていた。

他のチャンネルをひねっても、ジョンのことはどこの局でも報じられていなかった。
一男は携帯電話を取り釦を押した。
「あ、剛。おれおれ、一男だよ」

6

「ごめんね、急に誘ったりして。
こいつがさあ、昨日の夜いきなり電話を掛けてきてさ、おまえの友達の中でいっちばん可愛い子を二人連れてきてくれって言うもんだからさあ」
二人の女の子は「やだーっ、みえみえじゃん」と言いながら満更でもない様子だった。「あっ、こいつカズっていうんだ。
俺と同じクラスだったんだけど、そのままエスカレーターに乗って上に上がれば良かったのに、もっといい大学に行きたいからって、今浪人してんだよ」
昨日打ち合わせした通りしゃべってくれた剛に一男は感謝した。
「どこ目指してるの？」
二人の女の子のうち、エリカという、一男達と同じ高校に通っていたという髪の茶色い女の子が聞いた。
「まあ、一応、六大学なんだけど」
「じゃあ、早稲田とか慶応？」
「いけたらだけどね」
「カッコイーッ」
エリカは、月曜日のまだ少し早い時間の空いた店内に奇声をこだまさせた。
「あとで電話番号教えてネ」

夏見との夜

「エリカ、露骨じゃん」と割って入った剛はテーブルの下で一男の足を蹴った。
「だってしょうがないじゃん」
唇をとんがらせたエリカの顔を一男はじっと見たが、同じ高校だったとはいえ見た記憶がなかった。
その横でもう一人の夏見という女の子がくすっと笑った。
夏見はよその高校からちゃんと受験勉強をして東都大学に入学し、エスカレーターで上がったエリカより、五、見た目では十、偏差値が高かった。
「飲み会なんかやってていいんですか？」
夏見が一男に聞いた。
「毎日机にかじりついていても疲れちゃうからさ、たまには息抜きも必要かなと思って」
剛はもう一度一男の足を蹴った。
しかし、一男の冗談もこれが最後だった。
一男以外の三人は同じテニスサークルに入っていた。
話題は自ずとその話になり、次第に一男だけが一人蚊帳の外になっていった。
たまに夏見が気を効かせて「一男さんはテニスはしないんですか？」と声を掛けてくれるだけで、エリカに限っては一男のことを途中から“慶応ボーイ”と呼び、話の輪の中に入っていけなく暇そうにしている一男を見ると「よっ、慶応ボーイ、元気だしなよ」と言って茶化した。
そして、エリカがテニスサークルの友達と海外留学するという話になったとき、十八歳の一男が実は酒癖が悪かったことが判明した。
「何が海外留学だよ。
勉強する気なんかこれっぽっちもないくせに。

履歴書に“海外留学三カ月　”って書きたいだけだろ。
どうせ金髪の男に尻を嘗められて帰ってくるのがおちなんだから」
カルピスハイを飲んで少し頬を赤く染めていたエリカが一男の顔を正面から見て言った。「慶応ボーイ、感じ悪ーい」
なにおっ、と言う前に、一男は枝豆の殻が入っていた皿をエリカに投げつけた。
エリカは頭から枝豆の殻だらけになり、床に落ちた皿は割れた。
「ヤダーッ、なにー、これーっ！」
エリカの涙が混じった声に店内は騒然とした。
「私帰るっ！！」
立ち上がったエリカの髪に絡みついた枝豆の殻をとってあげながら剛は「カズっ、やりすぎだよ」と言って「とりあえずここは払っといてくれ、また今度返すから」と二人で店を出ていった。
店員が何事かと駆けつけると、夏見は「すいません」と言って割れた皿のかけらを拾い、一男は、ブツブツと独言を言いながらコップに入ったビールを飲み続けた。

ж ж ж ж ж ж ж

駅前のコンビニは、電車が到着したばかりか、会社帰りと見られるサラリーマンやＯＬ達で混み合っていた。
水色のユニフォームを着た二人の店員はレジで客を裁いていた。
通路に他の店員がいないのを確認すると、一男は油性マジックの“極太”とマンガ雑誌を手にとってレジに向かった。
レジの前には三人の人が待っていて、三人ともかごの中にカップラーメンだとか、缶ビールだとか、生理用ナプキンだとかを山盛り入れていたので、一男は列を外れるとマンガ雑誌をもとあった場所に戻し、コンビニを出た。
いつもいる場所にジョンはいなかった。
門扉の向こうには、主のいない犬小屋がひっそりと置かれていた。

一男は門扉にもたれ、しばらく玄関の横のガラス戸に写るジョンのシルエットを見ていたが、中から物音が聞こえてきたので、マジックにキャップを被せると、廊下の蛍光灯の傘に向け思いっきり投げつけた。

ж ж ж ж ж ж ж

（だめだ、なんにもやる気がしねえ。
やっぱり鬱病じゃねえかな。
おっ？　ドアの向こうに誰かいるじゃねえか。
あっ、また一男の野郎だな。
あいつだけは絶対に許せねえ。
俺様の自慢の金髪をこんなふうにしやがって。
それも、俺達のことがたまらなく嫌いだからって、あんなへっぴり腰で刈られると、よけいに腹が立つんだよ。
いっちょう吠えてやろうか）
「・・・・・・・」
（だめだ、声が出ねえよ。
腹がたってんのになんでなんだろ？
あっ、ご主人様が来た）
「ジョンちゃん、かわいそうにねえ。
恐くて眠れないのよね。
明日また違う病院に連れていってあげますからね。犬の精神科医の権威なんだって。今日予約入れといたからね」
その時、ガシャン、と何かが壊れるような音がした。
（一男の野郎だ。
あの野郎また何かしやがったな）
「何かしら？」
島田さんの奥さんが廊下に出てみると、プラスチックの蛍光灯の傘が粉々になって散らばっており、その脇に黒のマジックが落ちていた。

向かいの家を見ると、玄関の扉の横の部屋の灯が点いていた。
「やっぱり、あの子だわ」
島田さんの奥さんは一人ごちると、床に落ちていたマジックを、犬小屋の中に敷いてあった昨日までジョンの蒲団だった薄手の毛布を手にして大事に拾い上げた。

7

「廊下の蛍光灯の傘が割られてたんだって」
一男がリビングに入っていくと、典子が食パンをかじりながら言った。
「俺が帰ってきたときにはもう割れてたよ」
「あらそうなの」
「何か食べるものある？」
「食パンでいい？」
「うん」
典子は食パンを手に持ったまま、リビングとつながっているキッチンに行き、トースターの中に食パンを入れタイマーをひねった。
「昨日は剛君と？」
「うん」
「どう、学生さんは楽しそうだったでしょ」
「べつに」
「どうするの？」
「わからない」
「お父さんがああ言ってくれてるんだからさあ・・」
「考えとく」
トースターが、チン、と鳴った。

ж ж ж ж ж ж ж

（どこかにかわいこちゃんはいねえかなあ。
いるわけねえか。

ここは病院だし、おまけに精神科だからな。
みんな何か今にも死にそうな顔してるもんな、と言ってる俺も同じなんだけどな。
それにしても、動物の精神科って何なんだろな。
俺達の言葉も分からないのに、顔色だけで判断できんのかな。
連れてきてもらって言うのも何だけど、案外いい加減じゃねのかなあ。
あっ、亀じゃねえか。
精神の病んでる亀っているのかよ。
一万年も生きなきゃいけないのに、ちょっとしたことでくよくよしていて大丈夫なのかよ。
でも、俺がご主人様に飼われてきたときなんて、動物病院なんてなかったもんな。
死んでいく奴はそのまま死んでいったもんな。
どうして人間は俺達にこんなに優しくしてくれるんだ。
たくさんいる生き物の中で、他の生き物が絶滅する恐れがあるからって手を差し伸べてくれるのは人間だけだからな。
確かに牛や豚や俺達の仲間もどこかよその国では食べられてるみたいだけど、人間世界ってのは弱肉強食っていう感じはしないよな。どちらかと言えば、我ながらかっこいい言葉だと思うけど“共存”だよな。
仲良くしていこうね、そんな感じだからな。同じ人間にそういう人がいなくなったのかな。
子供の数がどんどん減ってきてるって何かで聞いたことはあるけど、俺達はその代替品なのかなあ。
どうして子供を生まなくなったんだろうな。何か人間様にはそれなりのご事情があるんだろうけど、あの亀を連れている女性だって、派手な格好はしてるけどまだ若いはずだぞ。あの人もこの先子供は作らず、亀と一緒に生きていくのかな。
そういえば、ご主人様にも明夫というおぼっちゃまがいたはずだ

よな。何年か前に急に姿を見なくなったけど、どこ行っちゃったんだろうな。毎朝、ご飯を盛った小さなお茶碗を高い台に乗せてチーンて鐘の音を鳴らして確か「明夫ちゃん」て言ってるはずなんだけどそれと何か関係があるのかなあ・・・）

ж ж ж ж ж ж ж

「なんで家になんか電話したんだ！！

恥かいたじゃねえかっ！」

「いえ、すぐに連絡させてもらったほうがいいかと・・・」

いつものアルバイトと思われる店員が、いつもながら無表情で答えた。

「だったら後で電話しくれだとかいくらでも言い方があるだろっ！」

一男の荒げた声を聞きつけたのか、カウンターの中のビデオテープがぎっしりと詰まったスライド式の棚が開くと男が一人出てきた。

「何かございましたでしょうか？」

男の胸の名札には“店長”と書かれていた。

おたくのミスで俺が迷惑を・・・、と一男が言いかけたとき「すいません、面接受けにきたんすけど」と声がして、見ると、耳と鼻にピアスをして髪を赤く染めた一男と同じ歳くらいの少年が立っていた。

「じゃあ、こちらに入ってください」

店長は少年を自分のほうに手招きすると、一男のほうを見て「すいません。ちょっと失礼いたします」と言って、少年と棚の奥に消えていった。

「ビデオはどうされますか？」

カウンターの下から、赤い字で『早くだして』のタイトルの向こうで裸の女が恍惚の表情を浮かべているビデオのパッケージを出してきた。

「もういらないよっ。

見る気なくしちゃったよ」

「そうですか」
珍しく、残念そうな表情をみせた店員がパッケージをカウンターの下に戻そうとしたとき「あっ、やっぱり、借りるよ」と一男は言った。
「ありがとうございます。
３００円になります」
ビデオテープを通いのケースに入れた店員は顔に笑みを浮かべて一男に渡した。
「一週間だよな」
「いえ。
新作なんで、２泊３日になります」
「なんでだよっ。
同じビデオじゃねえかっ！！」

８

「いい加減変えていけば」と典子に言われ、渋々、一男からもらったネクタイを一週間ぶりに他のものと換えて竹男が出ていった朝、４日延泊した『早くだして』を枕元に置いて寝ていた一男は、メールの着信音で目を覚ました。
〈今夜飲みにいきませんか？〉
夏見からだった。

女性との待ち合わせは、小学校の集団登校以来だった。
夏見からの電話の後、「今週中に必ず、予備校に通うか働くか結論を出すから」と典子に頭を下げまくりやっと借りた一万円を握ってユニクロへ行き、千円のＴシャツと千五百円の綿パンを買った。
夏見が手を振ってこっちに近づいてきた。
一男は心臓が破裂するかと思った。
待ち合わせの場所から五分ほど歩いて夏見が選んだ店は、入り口には名前の知らない大きな犬の等身大の置物が置いてあり、少し薄

暗い店内には若い男女のカップルばかりが三組テーブルについていた。
夏見は常連らしく、注文を取りに来た女性の店員と親しそうに何かを話し「カズ君、飲みもの何にする？」と急に聞いてきたので、慌てて一男は、この間の件があったので「ウーロン茶で」と答えた。
「勉強はかどってますか？」
「まあまあ。
まだ先も長いし、焦ってもしょうがないから」
ウーロン茶と、何かピンク色の飲みものが運ばれてきた。
「今日はお酒は飲まないんですか？」
「うん。
また荒れちゃうとやばいから」
「大丈夫ですよ。
私はエリカと違って、枝豆の殻を投げつけられたら、怒って帰らずに、その場で殴りますから」
夏見とは結びつかない言葉に一男は笑ってしまった。
「意外と恐いんだ」
「嘘です、冗談です。
私だったら、その場でうずくまって泣いちゃいます」
口元に笑みを浮かべて二人の会話を聞いていた店員に夏見はメニューも見ずに食べ物の注文をした。
「よく来るの？」
乾杯をしながら一男は聞いた。
「ええ。
雰囲気がすごく好きだし、料理も美味しいし、そんなに値段も高くないし。
あっ、そうだ、カズ君はワンちゃんは好きですか？」
大っ嫌いなんだ、と言いそうになって「うん、好きだよ。あんまり大きいのは苦手だけど」と普段ほとんど使っていない脳味噌が気を効かせた。

「ほんとですか。
私すごい好きなんです」
夏見は大きな瞳を輝かせた。
「この店も犬を基調とした店なんですよ」
一男はウーロン茶の入っているグラスに犬の絵が描かれてあるのを確認した。持ち上げてコースターを見るとそこにも犬の絵が、そうか玄関の犬の置物もその一つなのかと思っているとどこからか犬の、くーんと言う鳴き声が聞こえてきたような気がした。
音の出所を探ったが、わからなかったので、犬の鳴き声のＢＧＭでも流れているんだろうと自分を納得させた。
「私、家でも飼ってるんです」
「へーっ、名前はなんて言うの？」
「リリー。
ヨークシャーテリアの雌なんです」
どんな犬なのか想像もつかなかったが「かわいいねえ」と一男は答えた。
「カズ君とこは飼ってないの？」
「うん。
でも母親は好きみたいで、二年前にわざわざ、ペットの飼える今のマンションに引っ越してきたんだ」
「本当ですか！？」
夏見は大きな瞳を更に大きく輝かせた。
「いつか飼う予定とかあるんですか？」
「わからない。
世話だとか大変みたいだし、俺そういうの余り好きじゃないから押しつけられると嫌なんで、できたら飼わないでほしいと思ってるけど」
「そんなことないですって。
すごく可愛いし、何か嫌なことがあったときとか、寂しいときなんかは話し相手になってくれますから」

夏見ちゃん以外の女性が言っていたら思いっきり反論してんだろうなと一男は思った。
「私、あの子がいないと一人では住めないと思いますよ」
「あれっ、一人で住んでんの？」
「言いませんでしたっけ」
「初めて聞いたよ」
「岩手県なんです。
田舎もんでしょ」
「そんなことないよ」
店員が「マグロのカルパッチョです」と置いた皿の上の生まれて初めて見た何か赤い魚の切り身みたいなものを自分の皿に乗せ、すぐに口へ運ぼうと箸を上げたとき、一男はその赤い身をズボンの上に落としてしまった。
あっ、と言ってテーブルの上のおしぼりで慌てて拭くと「大丈夫ですか」と言って夏見は自分のおしぼりを差し出してくれ、初めて、その冷たい氷のような指に触れた。

やっと、浮いていた足が店の床についたとき、一男はウーロン茶をカールスバーグに代えた。
「で、大学って楽しい？」
ベトナム風生春巻を頬張りながら一男は夏見に聞いた。
「楽しいですよ」
「本当に？」
「どうしてですか？」
「たまに、こんな毎日馬鹿みたいに勉強していて大学に入って、もし楽しくなかったらどうしようかなって思うんだ」
「本当に楽しいですよ」
「毎日？」
「毎日ってことはないですけど、まあ、大体は」
「無理して楽しんでるってことはない？」

「それはないと思うんですけど・・」
「せっかく苦労して入ったんだから、楽しまなくちゃ損だ。そんなに大して楽しくないことでも無理矢理楽しいことにしてしまえってことない？」
「ええ・・・」と夏見は、チョー辛っ四川風麻婆豆腐を口にしながら答えたが、一男の目がこの間エリカに枝豆の殻の入った器を投げつけたときの目になっているのに気づき、ベトナム風生春巻がいつ飛んできてもいいように、取り替えてもらったおしぼりに手をおいた。
「そうか・・」と言った一男が右手を上げた瞬間、夏見は身構えた。
しかし、一男は通りがかった店員に「すいません、青島ビールください」と言い、もう一度夏見の顔を見た。
「そんなに楽しいことがいっぱいあるんならあいつに分けてあげればよかったんだなあ。　そしたら、あいつも石なんか投げなくて良かったんだよ」
「それ、どういう意味ですか？」
「ううん、何もない、ひとりごと。
俺さ、プレッシャーかなあ、時々もう大学なんか諦めて働こうかなって思うときあるんだ」
「それはそれでいいと私は思いますよ。
大学を出てサラリーマンになるだけが人生じゃないと思うし、そんな人ばかりじゃ世の中おもしろくもなんともないですもんね」

夏見がデザートのおしるこを食べ終えたとき、「カズ君、怒んないでね」と、サントリーモルツを飲みながら真っ赤な顔をしている一男に言った。
「何が？」
「この間エリカが話していた留学の話しなんだけど、一緒に行く予定だった友達が急にいけなくなっちゃって、そのかわりに、私、エリカと一緒に行くことにしたの」

「あっそうなの」
「怒んないの？」
「どうして？」
「だって、この間、そんな上っ面だけの留学なんかして何になるってエリカに枝豆の殻の入った器投げつけたじゃない」
「夏美ちゃんはちゃんとまじめに勉強してくると思うから」
「本当に？」
「うん。
どれくらい行ってくるの？」
「一カ月だけ。
留学って言うのは大袈裟で、ホームステイって言うのが本当は正解なんです」
「気をつけていってきてね」
一男はかなりビールがまわってきて、少し眠そうに言った。
「で、カズ君ね、お願いがあるんだけど・・」
「なに？」
「さっき話したリリーのことなんだんけど、私がいない間、預かっていてほしいの」
「へっ！？」
気のせいか、また、犬のクーンという鳴き声が聞こえたような気がした。
「私、知り合いがこっちには全然いないし、友達もマンションに住んでいる子ばかりなんで」
「いいよ」
「ほんと？」
夏見は目をウルウルして言った。

女の子と腕を組んだのは、小学校のフォークダンス以来だった。
このまま時よ止まれ、一男は真剣にそう思った。
「で、夏美ちゃん、いつから行くの？」

「明日からなんです」
「えっ！？
じゃあ、犬はどうすんの？」
「今持って来てるんです」
言った夏見は、手に持っていたピンク色のバスケットを開けると、クーンと言ってリリーちゃんが出てきた。
「ギャーーーッ」
夜の戸張が降りた繁華街に、一男の叫び声がこだました。

「可愛いわね」
リリーを自分の子供のようにして抱いている典子の横で、一男は、リリーの入ったバスケットをなるべく自分の体に近づけないように手をほとんど水平にして家まで帰ってきたため筋肉痛になった腕をもみほぐしていた。
「で、いつまでなの？」
「一カ月」
「自分で面倒見なさいよ」
「そんな嫌がらせやめてよ
俺が犬嫌いなの知ってるくせに」
「それなら、預かってこなけりゃ良かったのよ」
「だってしょうがないじゃん。
困ってたんだから」
「鼻の下伸ばして、安請け合いしてくるからよ」
「頼むよ」
「わかったわ。
その代わり、今朝言ったこと、明日じゅうにカタをつけなさいよ」
「そんなぁ・・」
「いやならいいのよ」
抱いていたリリーを典子は一男に差し出した。

一男、ジョン、幸せを掴めるか・・・

「わっ、やめろっ！！
わかったよ、わかったからその手を早く引っ込めて、お願いっ！！」

9

「5日間延滞で千五百円になります」といったアルバイトの店員は、いつも通り一男にからまれると思い身構えたが、一男は何も言わず千円札を二枚差し出した。
そして、五百円のお釣りを受け取った一男は、懺悔室でひざまずくクリスチャンのような目をアルバイトの店員に向けた。
「面接まだやってますか？」
「ア、アルバイトですか？」
「ええ」
「ちょっと待ってくださいね。店長に聞いてきますんで」
暫くすると、店員はビデオテープがぎっしりと詰まったスライド式の棚の後ろから出てきた。
「大丈夫です。
履歴書はお持ちですか？」
「はい」
じゃあこちらに、とカウンターの中に手招きされた一男は「この間の赤い奴は？」と店員に聞いた。
すると、「うちの店長、ああいうの、これなんですよ」と言って、店員は胸の前に小さな×を作った。
「今予備校に通ってるんですか？」
和田と言う名の店長が一男に聞いた。
「いえ」

「じゃあ、フリーターって言うことですか？」
「まあ・・」
「もったいないねえ、いい学校でてんのに。
どうして大学には行かなかったの？
そのまま上に上がっても良かったのに」
「まあ、行ってもあまり意味がないかなと・・・・」
「そんなの行ってもいないのにわかったの？」
「高校の時から、ずっと学校なんて行く意味あんのかなって思ってたんで・・・」
「まあ、それぞれ考え方があるからね」
高校入試の受験票に貼った写真を貼り、学歴の最後の欄に“私立東都大学付属高校卒”と書かれた履歴書を見て店長は言った。
「じゃあ、うちの条件なんですけど・・・」と言って、店長は、勤務時間は夕方五時から夜十二時まで、週最低四日勤務のうち土日は必ずどちらか出勤、時給は初めの一カ月は研修期間と言うことで７００円、研修期間が終わると５０円アップ、更に夜十時以降は１００円アップになることを早口で説明した。
一男は、月曜から木曜と、店長にできれば土曜に出勤してほしいと言われ、「わかりました」と言って採用が決まった。
「アルバイトの経験は？」
「ありません」
「じゃあ、記念すべきフリーターデビューなんだ」
「まあ・・」
「なにも仕事は難しくないから。
今フロントにいた、武田君って言うんだけど、彼も今年の春高校を卒業して、アルバイトに来てくれてるんだけど、彼と明日の夜から一緒に入って、いろいろと教えてもらってくれる。単純な仕事だからすぐに覚えられると思うし。
あと、従業員割引でビデオは二百円で借りれるから好きなのがあったらどんどん借りてくれて結構です。ただし、新作ビデオだけは、

お客様優先と言うことで、少し時間が経って貸し出し頻度が落ちてから借りるようにしてください」
「わかりました」
「アダルトばかり借りないようにね。全部データが残るからすぐにわかるんで」
笑わずに、はい、と答えた一男に、店長は「じゃあ明日からお願いします」と頭を下げ、立ち上がろうとした一男にもう一言だけ言った。
「あくまでもサービス業だから“です”“ます”は、はっきりと言ったほうがいいよ。あと、笑顔もね」
「は、はあ」と一男は顔を引きつらせながら言った。

ж ж ж ж ж ж ж ж

玄関のドアを開けると、リビングと廊下を隔てるドアが開いていて、その向こうに犬の姿が見えた。
瞬間、体が硬直し、こっちに向かって駆けてきた犬がリリーだとわかったとき、すでにリリーは一男に向かってジャンプした後だった。

典子に支えられるようにして立ち上がった一男は、口元のよだれを拭った。
「ど、どうして放し飼いになんかするんだよ」
「家の中でリードに繋いで飼っている家なんかないわよ。
島田さんとこみたいに門扉があって玄関の前にスペースがあれば別だけど、うちは玄関でるとすぐに外の廊下なんだからしょうがないわよ」
「理由はどうあれ、とにかく俺の目の前でうろうろさせるのだけはやめてくれよ、お願いだから」
「じゃあどうしろって言うのよ。
家の中に檻でも作れって言うの」

「いや、だから、俺がいるときだけでいいからどこかで隔離するとかさあ・・」
「あなたがいるときって、ほとんど毎日ずっといるじゃない。
それじゃあ、リリーちゃんが可哀想よ」
「それなら大丈夫だよ。
明日からバイトに行くんで、夕方からは家にいないから」
「バイトって？」
「さっき決めてきたんだ。
駅に行く途中にあるレンタルビデオ屋。
月曜から木曜と土曜日の週五日。夕方の五時から十二時まで」
「じゃあ大学は？」
「いかない」
リリーが典子の胸の中でクーンと鳴いた。
「あら、そうなの。
お父さん楽しみにしていたのに・・・」
「大学行くだけが人生じゃないし。
あっ、そうだ、風呂なんてどう」
「風呂って何よ？」
「リリーを飼うところだよ。
あそこならそんなに狭くないし、それに俺が風呂に入るときでも、浴槽に入れて蓋をしておけばシャワーだけでも浴びれるし。
ねっ、そうしよう」
「わかったわ。
じゃあいろいろと用意するものがあるから、私ペットショップに行ってくるから、あなたリリーちゃんをお散歩につれていってあげて」
「ちょっと待ってよ。
そんなのできるわけないよ」
「あなたが預かってきたんだからそれぐらいやりなさいよ」
「途中でうんこでもしたらどうすんだよ」

「その夏見ちゃんだっけ、その子の出したうんこだと思って拾ってあげなさいよ」
言い残すと典子は出ていってしまった。

ж ж ж ж ж ж ж

(あれっ、一男の悲鳴じゃねえか。
あの馬鹿、またゴキブリでも出てきたんだろ。
毎日毎日ぶらぶらしやがって。暇だからろくなことしねえんだろな。少しは働けばいいんだ。
おっ、誰か出てきたぞ)
ジョンは背伸びをして郵便受から外を覗いた。
(なんだ、一男のおふくろさんじゃねえか。
しかし、あの人も苦労だよな。一男みたいな馬鹿な子供を持って。いっそのことおいらみたいに犬のほうが良かったかも知れないよな)
「どうしたのジョンちゃん?」
立ち上がって外を覗いているジョンに気づいた島田さんの奥さんが近づいてきた。
「くーん」
「そうよ、外が恐いのよね。また誰かにいたずらされると思うと恐くて出れないのよね、可哀想に・・・」
(申し訳ねえ、ご主人様。
ただ、一男のことなんか、おいら全然恐くねえんだ。あんな奴、ちょっと吠えてやればしっぽまいて逃げていくんだ。
なんていうか、今の俺には刺激が必要なんだ。こう、心にぽっと火が点くような、なんて言ったらいいのかわかんねえんだけど・・。
あれっ、また一男の悲鳴じゃねえか。とうとうあいつも頭がいかれちまったかな?)
「向かいのあの子の声ね。
あの子にはジョンちゃん気をつけなさいね」
「くーん」

ジョンの頭を撫で、島田さんの奥さんは戻っていった。
（俺もこのまま朽ちていくのかなあ。
本当に俺は幸せだったのかなあ。
この扉を開けて門を飛び越え、新しい世界に飛び込んでいこうかな。
でも、そんなことしたら、ご主人様が悲しんじゃうよなあ。
あーあ・・・・）
「キャンキャン」
（あん、なんだ？）
「キャンキャン」
（あれ？
確かに犬の声だな。
いや、俺もひょとして一男みたいに頭がおかしくなったかもしれねえ。
人の声か俺達の声か分からなくなっちまったんだ。情けねえ）
その時、向かいの家の扉が開く音がし、すぐに一男の「やめろーっ！！」と言う悲鳴がした。
（あの野郎、本当に頭がおかしくなったんじゃねえのか）
ジョンはもう一度立ち上がると郵便受から外を覗いた。
そこには、へっぴり腰の一男が、リードに繋いだヨークシャーテリアに振り回され、わめき散らしている姿があった。
（おいら、目までおかしくなっちまったよ）
ジョンは前足で目を擦ると、もう一度郵便受から外を見た。
「キャンキャン」
門扉の向こうで、雌のヨークシャーテリアが、郵便受から覗いているジョンの目を見つめて鳴いていた。
「キャイーーーン！！！」
ジョンは前足でドアを蹴破ると、陸上選手がハードルを飛び越えるようにして門扉を越えた。
「なんだこの野郎！！」

一男は罵声を浴びせたが、ジョンに「ワウーッ！！」と威嚇されると、後退りし、握っていたリードを放してしまった。
よたよたと廊下を歩くリリーに、ジョンは後ろから乗りかかった。
「やめろっ、このエロ犬がっ！！」
（やめれるわけないだろっ。
今日の今日まで、大事に守ってきた童貞をやっと捨てれるって言うのに。
これでおいらも晴れて立派な雄になれるって訳だ）
ジョンはもう一度一男に向かって威嚇の「ワウーッ」を発すると、短い後ろ足を踏ん張り、ぐっと腰に力を入れた。
（うぉーーっ！！）
ジョンは、射精とはこういうものかと思った。
全身の力が抜け、体が宙を舞っているような、確かに廊下の天井が見えた。
（あー、気持ちいいなあ。もうこのまま死んでもいいや。
あ痛っ、何か後頭部を打ったような痛みだぞ。ひょっとしてこれが“エクスタシー”ってやつか）
しかし、それは、エクスタシーでも何でもなかった。
「ジョンちゃん、やめなさいっ、頭でもおかしくなったの！！」
ほとんど悲鳴に近い声を発して飛び出てきた島田さんの奥さんは、力まかせにジョンをリリーの背中から剥ぎとった。
ジョンは一瞬宙を舞った後、廊下に背中から落ち、仰向けになったまま気絶してしまった。
「お医者さんが言ってたように、やっぱり躁鬱病だったのよ。こんな可愛いワンちゃんを見て、急に鬱から躁になっちゃったのよ、きっとそうだわっ」
泣き叫ぶ島田さんの奥さんの横を、リリーに引っ張られるようにして一男が通り過ぎていった。

１０

リリーを預かって十日目の夜、バイトを終えて帰ってきた一男は、リビングのテーブルの上に一通の絵葉書が置かれてあるのに気がついた。
どこかわからない街並が写った絵葉書を裏返すと、ローマ字がたくさん並んでいる中にｎａｔｓｕｍｉを見つけ、数少ない日本語で書かれた“早く会いたいです”を確認した。

ж ж ж ж ж ж ж

ジョンは少しでもリリーの近くにいたいという一心で、ご主人様には申し訳ないと思いながら、童貞を捨て損ねた日の夜から三日続けて真夜中に吠え立てた。
堪り兼ねた島田さんの奥さんは「やっぱり躁病だわ」と心配しながらも、昼間の食欲も旺盛なことから「元気になったってことで」と自分を納得させ、ジョンを小屋に戻した。
そしてジョンは、朝と夕方の二回の散歩に典子につれられて出てくるリリーを見かけると、禁欲の塊となった囚人が如く、門扉のアルミのフレームの隙間から濡れた舌を差し出し「ゼーゼー」と重い息を吐いた。

ж ж ж ж ж ж ж

「まずいよ」
「大丈夫だって。
こんな古いビデオ誰も借りないって」
「たまに抜き打ちで調べてるみたいだぞ。
貸し出し回数が少ないやつをリストアップして、そのテープがちゃんとあるかどうか調べてるってカズと代わりに辞めていった人が言ってたぞ」
「パッケージを残しとくから駄目なんだよ」
と言って、一男は、若い頃のクリント・イーストウッドが映った“荒野の用心棒”のパッケージを両足で踏みつけ、ごみ箱に放りこん

だ。
あっけにとられている武田君の横から一男はレジにひょいっと手を伸ばし、千円札三枚を抜き取った。
「それは絶対にまずいって」
武田君は顔を紅潮させて言った。
「新人の俺がミスしましたって言えばそれで通るだろ」
「カズ、そのレジの金額が出ている横に赤く小さなランプが点っているだろ」
「ああ」
「それ、店長が裏の部屋から見てるんだよ。
あの人はそういう人なんだから」
「あっ、そう」
一男は千円札を口に加えると、その小さな赤いランプに向かって「しぇーーっ！」と叫んだ。
「早く飲みにいこうぜ。
タケちゃん、ゴミだけ捨てといてよ。俺、そこまで大胆じゃないから」

ж ж ж ж ж ж ж

（あっ、リリーちゃんの声がしたぞ。
今何してんだろなあ。
風呂でも入ってんのかなあ。
リリーちゃんと一緒に風呂なんか入れりゃ、おいら今すぐ死んだって悔いはねえよ。
それにしても、この間は惜しかったよな。
絶対にいけたって思ったのに。
今でも、一男のおふくろさんくらいだったら飛びついてちょっと脅してやればなんとかなるんだけど、ご主人様に迷惑かけちゃあまずいからな。
あの一男の野郎さえいなけりゃ、もう少しうちのご主人様も一男

のかあちゃんとも仲良くつきあうんだろうけど、そうなりゃうちの家へリリーちゃんが遊びに来たり、おいらが向こうの家へ行ったりでそのうち二人の中も普通ではなくなって・・。
とにかくあの野郎だけはこの間の借りもあるから、なんとかしてやらねえと・・・まあ、とにかく今日はまたリリーちゃんの夢でも見ようとするか）
「グーーッ」

ж ж ж ж ж ж ж

「カズさあ、やっぱり現金はまずいって」
週末でもないのに朝の四時まで開いている居酒屋は、一男と同じ歳くらいの学生の団体が一気飲みを繰り返し、終電に乗り遅れたスーツ姿のサラリーマンがネクタイを外して上司の悪口を続けていた。
「タケちゃん、心配しすぎだって。
さっき言ったように新米の俺のミスにしておけばいいんだよ」
「でも、あの、しぇーーっ、は・・・」
「あんなビデオ、いちいち見てるかよ。
店長もそこまで暇じゃないって」
「いや、あの人はやる人だって」
「それならそれでいいじゃん。
それより、タケちゃんもっと飲めよ。それ何飲んでんの？　まさかウーロン茶じゃないよな。ちょっと飲ませて」
タケちゃんからグラスを奪い取った一男は口を付けるなり、タケちゃんの頭を張った。
「こんなん飲んでんから、いろんなことが気になるんだよ。
ちょっとすいませんっ、こいつに生ビールの大ジョッキ持ってきてやってください」
通りすがりの店員を捕まえて言った一男は、自分のジョッキが空になっているのに気づいた。
「すいませんっ、大ジョッキもう一つ追加っ」

タケちゃんは、二度とこいつとは飲みに来ないぞと誓った。

店の中の全ての動きが止まり、タケちゃんの目の前の大ジョッキに入ったビールの泡がすべて消え健常者の尿のようになったとき、生まれて初めて飲んだレモンチューハイのうまさに感激して、立て続けに三杯飲んで、産卵している亀の様な目になった一男の携帯電話が震えた。

〈もっしー〉

剛だった。

〈なにやってんだよ〉

「酒飲んでんだよ」

〈嘘つけっ。

どうせ、アダルト見て抜いてんだろが〉

「ばかやろっ。

おまえと一緒にするなっ」

〈あんまりからむなよ〉

「うっせーっ」

〈さっきさあ、おまえの天敵から電話があってさあ〉

「天敵ーっ？」

〈エリカだよ〉

一男はエリカではなく夏見の顔を浮かべた。

〈三十日の二時に帰ってくるんだって〉

「三十日って何曜日だっ」

〈えーっと、木曜日だな〉

「じゃあ、バイトだっ」

〈夏見ちゃんがおまえと会いたがってるってエリカ言ってたぞ〉

「本当かよ、よしっ、じゃあ俺もお迎えに行くよ、羽田かっ？」

〈成田だよ〉

「ラジャーっ」

一方的に電話を切った一男は「レモンチューハイもう一杯おかわ

りっ」と店の天井に向かって叫び、よだれをたらしてテーブルの上で突っ伏しているタケちゃんの頭を思い切り張った。

11

「月末だから遅いわよね」
典子は、食パンを食べ終えコーヒーを飲んでいる竹男に聞いた。
「ああ。
たぶん日付が変わると思うから先食べといてくれ」
竹男は一部上場企業の化学品メーカーに勤め、経理畑一筋で今日まで来た。
「うちのワンちゃんは元気でやってるのか？」
「リリーちゃんは今日でさよならよ」
「違うよ、一男のことだよ」
「ああ。あの子ならまじめにアルバイトに行ってるわよ」
「そうか」
「あなたは大学に行ってほしいんでしょうけど、私は良かったと思ってる。
もし、あのまま引きこもっちゃったらどうしようかなと思ってたもの。
最近、私とはよく話すようにもなったし。
また、気でも変わって大学へ行きたいって言い出したら、その時はまた相談に乗ってあげてよ」
「ああ」
久しぶりに、父の日に一男にもらった犬の絵柄のネクタイをして、竹男は出ていった。

ж ж ж ж ж ж ж

「何か食べる？」
「いらない」
テレビ画面では、タモリが、いいともっ、と二日酔いの頭に響く

声を張り上げ、何の芸もない、どうして毎年高額納税者に名を連ねているのかわからない、自称“タレント”達と一緒に右腕を振り上げていた。
「今日もアルバイトでしょ」
「うん」
「あっ。
あなた今日お給料日じゃない」
「そうだっけ」
「初めてのお給料なんだから、何かおごりなさいよ」
「いいけど今日は駄目だよ。
明日ならバイトも休みだからいいけど」
「じゃあ、みんなでご飯でも食べに行きましょ。
お父さんも喜ぶわ」

ж ж ж ж ж ж ж

(おっかしいなあ。
リリーちゃん今日はお散歩お休みかなあ。
あっ、一男が出てきやがった。
あの野郎、最近よく出かけるなあ。
どうせろくでもねえことやりに行ってるんだろうけど。
おお、なんだ、にやにや笑いながら近づいて気やがったぞ)
「おいこら、ジョン。
今日でこのリリーちゃんともお別れだぞ。
いつまでも鼻の下伸ばしてんじゃねえよ。バーカ」
手に持っていたバスケットを門扉の向こうからジョンに差し出した一男が、ファスナーを少しだけ開けると、リリーの鼻先が少しだけ見えた。
(リリーちゃんっ!!)
「じゃあな」
ファスナーを閉めると、一男はエレベーターホールに向かって歩

き出した。
（待ってくれっ、ちょっと、待ってくれ！！）
「ワォウッ！！ワォウッ！！」
一男はどんどん遠ざかっていく。
ジョンはリードを食いちぎると、門扉を飛び越えた。
けたたましく吠えるジョンに気づいた島田さんの奥さんが家から出てきた。
「ジョンちゃんっ！」
（ご主人さまっ、止めないでくれっ、俺は今リリーちゃんをなくしてしまうと、本当に自分がどうなってしまうかわからねえんだ、許しておくんなせえ）
後から追ってくるジョンに気づいた一男は猛然と廊下を走り始め、エレベーターホールに着くとちょうど止まって待っていたエレベーターに飛び乗り、《閉》の釦を連打した。
ゆっくりと閉まり始めた扉が、ガシャンといって完全に閉まり終えたとき、エレベーターホールにジョンが駆けてきた。
「バーカ」
エレベーターはゆっくりと下降し始めた。

ж ж ж ж ж ж ж

空港に近づくにつれ、大きなスーツケースを持った乗客の割合がどんどん高くなっていった。
空港へ行くのは、一男にとって、高校の修学旅行で沖縄へ行くのに羽田へ行った時以来だった。
木曜日とあって、空港ロビーは混み合っていなかった。
それでも、大きなスーツケースを楽しそうに転がしている若い女の子達を見かけると、自分までも、これからどこか旅行へ行く気がしてなぜかうきうきとした気分になった。
航空会社のチェックインカウンターの前に、水着姿のキャンペーンガールのパネルが立てかけてあった。

一男は、エメラルドグリーンの海から上がって水着から水をしたたらせている夏見ちゃんを想像した。
剛との待ち合わせ場所に着くと、まだ来ていなかったので、近くにあったスナックコーナーでアイスコーヒーを買った。
滑走路が見える窓際に腰を下ろすと、降りてくる飛行機と上っていく飛行機をただボーッと見ているだけだったが、なぜか、退屈はしなかった。
いつか、大きなスーツケースを持ってこの空港に来て、あの上っていく飛行機に乗って、どこか南の島へ旅立つ。
夏見ちゃんと・・・。
一男は生まれて初めて“目標”というものをもった。
透明の容器が氷だけになったとき、時計の針は二時を二十分回っていた。
剛に電話を入れたが、話し中だったので、一男は席を立つと、待ち合わせ場所を通り過ぎ、到着ゲートに向かった。
しかし、到着予定を知らせる掲示板に、オーストラリアから二時に成田に着く便を見つけることはできなかった。
唯一、一時半に到着予定のＪＡＬの便が一便だけあったが、すでにその便は到着済みだった。
時間聞き違えたっけ、とゲートの向こうでコンベアの上を流れる荷物をとっている人混みの中に夏見を探したが見つからなかった。
一男はもう一度携帯電話を取りだし、剛の番号を押した。
呼びだし音を聞きながら、一歩、二歩と歩を進め、何気なく、掲示板の向かいにあるカフェに、一男はピントを合わせた。
そこには、四人掛けのテーブルの片側に肩を寄せあって座る、夏見と剛がいた。
〈もっしー〉
剛は夏見に軽くキスをした。
「・・・・・・・」
〈カズか？〉

「・・・・・・・」
〈おい、カズなんだろっ。
なんとか言えよっ〉

ж ж ж ж ж ж ж

駅に着くと、一男は、コインロッカーに、リリーが入っているバスケットを放り込んだ。「クゥーン」
一男は無視して、鍵も掛けずに駅を離れた。

ж ж ж ж ж ж ж ж

「店長が呼んでるよ」
五時に五分遅れて店に入ると、タケちゃんが目をあわせずに一男に言った。
カウンターの奥の部屋に入ると、和田店長が少し笑みを浮かべながら、足を組んでソファに腰を沈めていた。
「遅刻しちゃまずいよ」
一男は何も言わなかった。
「君もいずれちゃんとした会社で働くようになるんだから、今から気をつけておかないと。遅刻は絶対にダメだよ、絶対に。
あっ、それと、これ今月の給料ね」
和田店長は給料の入った封筒を一男に渡した。
「中身確認して合っていたらここにサインしてね」
和田店長は、テーブルの上にボールペンと人の名前の横に金額の書いた行が五行ほどある紙を置いた。
「悪いけど、今日で辞めてくれる」
封筒を開けようとした一男の手が止まった。
「最近、テープがよくなくなるんだよ。
あと、現金もね」
おもむろに、和田店長は、テーブルの隅に置いてあったリモコンを手に取り、釦を押した。

すると、狭い部屋にこれ見よがしに置かれてある畳一畳くらいの薄型液晶テレビに電源が入った。
すぐに一男は、千円札を口に加えて、しぇーーっのポーズをとる自分の姿を見た。
「武田君と同じ歳なんだよね」と言って一男の目を見ようとした和田店長だったが、すでに、一男の手に握られたボールペンのペン先は、自分の脳天に到達しようとしていた。
ギャーーッと言ってソファから転げ落ちた和田店長の額には、みるみるうちに幾筋もの血の筋ができた。
一男は、立ち上がると、給料の入っている封筒を和田店長の顔に投げつけ、部屋を出た。

ж ж ж ж ж ж ж

「ジョンちゃん、あの子がまた何かしたのよね。そうよね」
「・・・・・・・・・・」
（・・・・・・・・・）
「もう許せないわ。
今日という今日は絶対に言ってやるからっ！！」
いきり立つ島田さんの奥さんの足もとで、ジョンは元気なくうなだれた。

ж ж ж ж ж ж ж

Tシャツに付いた血が気になった。
昔、何かのテレビで、衣服に付いた血を落とすには牛乳がいい、と言っていたのを思い出した一男は、駅の売店で、瓶に入った牛乳を買った。
直接牛乳を血の付いたところに染ませ、改札から出てくる乗客に気づかれないようにTシャツを揉んだ。
しかし、赤い色は落ちなかった。
半分以上残っている牛乳瓶を手にした一男は売店の斜向かいにあ

るコインロッカーに行き、片っ端から扉を開け、リリーの入ったバスケットを見つけると、ファスナーを開け、手に握っている瓶の中の牛乳を流し込んだ。

切っていた携帯電話の電源を入れると、着信履歴に《ツヨシ》の文字がずらっと並んでいた。

自転車に乗った警察官が横を通り過ぎる。

無線のザーーッという音が耳につく。

マンションのエントランスに着いたとき、また剛からの電話が鳴った。

十回目の呼びだし音を残して切れると、すぐにメールの着信を知らせる別の着信音が鳴った。

《いまどこ？

明日、二人の凱旋報告会やるから

とにかく連絡くれ》

『返信』の画面を出し、一男は“い”“ぬ”とうち、“犬”に変換すると、『ＯＫ』の釦を押し、すぐに送信した。

送信が終わったことを告げる電子音が鳴ると、もう一度、電源を切った。

エレベーターを降りると、強い西日が一男を追いかけた。

Ｌ字型の取っ手に手を掛け、家のドアを開けようとしたとき、向かいの島田さんの門扉が半開きになっているのに気がついた。

覗くと、小屋の中にジョンはいなかった。

今朝の件でまた家の中に入れられたのかなと、一男は取っ手を下に下げ、開いたドアの隙間に体を滑り込ませようとしたとき、ポコン、と薄いブリキの板がへこむような音が廊下の向こうからした。

西日を手で遮りながら顔を向けてみると、廊下の突き当たりに、黒い小さな影が一つ伸びていた。

視線を上げると、廊下の隅においてある消火器ボックスの上に誰かが乗っていた。

子供かなと、目を細めて見てみると、ジョンだった。

１２

「一男っ、早く出てこいっ！」
翌朝、竹男が激しく叩くドアの音で、一男は目を覚ました。
「なにしてんだっ、早く出てこいっ！」
典子の「近所に聞こえるじゃないっ」という声が混ざった。
「おまえ、昨日の夕方の五時から七時の間、どこで何してた」
眠い目を擦りながら、部屋から出てきた一男に竹男は迫った。
「バイトに行って、それから、後は家にいたよ」
「あなた、昨日アルバイトじゃなかったの。
どうして早く帰ってきたの？」
典子が少し心配そうに聞いた。
「急に・・・・ちょっと・・・」
「警察から電話があった。
聞きたいことがあるからって」
少し呆れたような顔をして、竹男は続けた。
「命に別状がなかったからいいものの。
どうしてこんなことをしたんだ？」
「あいつが悪いんだよ・・」
「まあ、おまえの気持ちもわかるよ。
昔から犬が嫌いだってのはわかってるけど・・」
「い、犬？」
「でも、何も、投げ捨てることはないだろ。」
「ちょっと待ってよ。
何のこと言ってんの？」
「もういいよ。
前に毛を刈って、顔に落書きしたのもおまえだろ。
廊下の蛍光灯割ったのもそうだろ？
島田さんの奥さんが、おまえの指紋の付いたマジックを警察に渡

したんだ」
「ま、まあ、それは、そうなんだけど、その、投げ捨てたってのはなんなんだよ？」
「もういいわよ、一男」
典子が、頬を伝う涙を拭いながら言った。
「よくねえよ。
話しの意味が全然わかんねえよ」
「ジョンが何者かにそこの廊下から下に投げ捨てられたんだよ」
「えっ！？」
「もういいよ、一男。
こうなったのも俺が悪いんだよ。
警察には俺からちゃんと話すから、おまえも素直に罪を認めろ」
「そんなこと俺やってねえよ」
「もういいよ、わかったから」
典子に続いていつのまにか頬に涙を伝えていた竹男は一男の腕を掴んだ。
すると、一男は、その腕を振り払い、二人を押し退け、家を飛び出ていった。

ж ж ж ж ж ж ж

「ジョンちゃん・・・」
島田さんの奥さんは、慌てて塗ってきたファンデーションを涙で溶かしながら、四本の足のうち三本の足を包帯でぐるぐる巻にされたジョンの体を優しくさすった。
「私が悪かったのよ。
ちゃんと家の中にあなたを入れておけば、あの子にこんなことされずに済んだのよ」
（違うんだ、ご主人様。
これは、俺が自分の手で、いや、自分の足で、やったことなんだ。
一男には罪はねえんだ。

だから、あいつを責めるのは辞めておくんなせえ。
悪いのは全部あっしなんだ。
せっかく親から頂いた命を自分の手で、いや、自分の足で殺めようとし、これまでお世話になったご主人様に後ろ足で砂を掛けるようなことをしてしまって、本当に申し訳ねえ。　もう、つまらない考えは起こさないようにして、あと何年生きられるかわかんねえけど、ご主人様、また一つ、よろしくお願いしやす）
「クゥーン」

ж ж ж ж ж ж ж

開店したばかりの大型スーパーは客もまばらだった。
ハサミが陳列されている棚の前に来たとき、一男は、いつもの位置にある防犯ビデオを確認し、いつもの場所で立っている店員を確認した。

駅の売店の横にある自動販売機でジュースを買おうとジーンズのポケットに手を突っ込むと、ハサミしか入っていないのがわかった。
ちぇっ、と舌打ちした一男は、コインロッカーへ行き、リリーの入っているバスケットを取り出した。
ファスナーを開けると、小学生の時、こぼした牛乳を拭いた雑巾をそのまま放っておいて、久しぶりに教室の床を拭こうとして手にとったら、気絶しそうになった・・・そんな匂いがした。
しかし、リリーの鳴き声は、聞こえなかった。
二、三回横に振ってみたが、バスケットの中からはコトリとも音がしなかった。
「なんだ、やっぱり、人間の労働力って、なんの値打ちもないんだ」
一人ごちた一男は、ジーンズのポケットの上から、ハサミを撫でた。

了

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0703d/

我輩は犬でござぁます

2010年10月26日05時33分発行